

〈書評〉

『国際バカロレア教育と学校図書館：探究学習を支援する』

アンソニー・ティルク著 根本彰監訳 中田彩, 松田ユリ子訳 学文社, 2021年10月, 136p.
ISBN 978-4-7620-3106-9 本体2,200円+税

国際バカロレア教育とは、国際的に通用する大学入学資格を与えることを主な目的として開発されてきた国際的な教育プログラムである。現在は日本の小学校や中学校に相当する教育プログラムや、職業教育に関連するプログラムも存在するが、その主たるものは日本の高校2、3年次に相当する「国際バカロレア・ディプロマプログラム (International Baccalaureate Diploma Programme、以下IBDPと略記)」という2年間の教育プログラムで、本書もこのレベルのプログラムを対象としている。

IBDPの特徴はさまざまあるようだが、本書の著者は、「探究に焦点を当てたカリキュラム」(p.i)としてそれを見ている。そしてこの点において学校図書館の役割は大きく、学校図書館員は「個々の生徒の学習を支援し向上させる」(p.i)ことを最優先の目標とすべきであるという。本書はIBDPに関わる図書館員としての立場から、そのための戦略や事例を紹介する書となっている。

探究学習は、日本においても学習指導要領に記載された「主体的・対話的で深い学び」との関連で、近年注目されているトピックだろう。またこれと連動するかたちで、学校図書館改革は日本でも重要なテーマとして認識されつつある。本書では一貫してIBDPとの関連で論じられているものの、その内容が今後の日本の学校教育や学校図書館のあり方のヒントとなりうることもまた明らかだろう。

著者のアンソニー・ティルクは、IBDPと学校図書館に長く関わってきた実践家である。日本のインターナショナルスクールの図書館での勤務経験もあるようで、それは本書にも反映されている。本書は、基本的には彼の博士論文をベースにしているようだが、各章の終わりに「図書館員のための実践的戦略」がまとめられている点など、理論的というよりも実践的な問題意識を強く感じる構成となっている。

本書の全体は9章から成り、前半はIBDPの紹介が主であるため、日本の多くの読者にとってはさほど重要とは思われないかもしれない。しかし、IBDPにおいて探究学習がどのようなものとして具体化されているかを知るうえでは、重要な項目も含まれている。とくに、知るプロセスを探求する授業とされる「知の理論 (Theory of Knowledge)」と、日本の大学卒業論文にも近い成果が求められる「課題論文 (Extended Essay)」は、IBDPにおける探究学習の中心的なものであり、その内容に興味を抱く読者は多いだろう。前者は第3章に概要説明があり、後者は第4章のテーマとなっている。

また、第5章で説明されているIBDPで求められる「学習者像 (Learner Profile)」は、近年、教育界でも意識されることが増えている構成主義的な知識観と関わりが深い。学習者像として、具体的には10の要素が挙げられているが、なかでも「考える人」、「挑戦する人」、「探究する人」、「信念をもつ人」、「コミュニケーションができる人」などは、知識の能動的構成が重視されていることの表れであり、「主体的・対話的で深い学び」として目指されているものとも合致していると言えるだろう。ただし、評者の立場で言えば、こうした学習者像はあるべき姿というよりも、人間はすでにつねにそうであるというのが本来の構成主義的な人間観である。

学校図書館ないし学校図書館員としての問題意識が強く現れているのは、後半の三つの章である。第6章では、「IBDPの生徒は学校図書館をどのように使うのか」というタイトルで、生徒にとっての学校図書館が論じられている。IBDPでは各教科においても探究学習が行われているが、図書館利用という点では、やはり前述の「知の理論」と「課題論文」に関わるものが多いようである。とくに図書館資料は「課題論文」において最も利用されており、この点において図書館

員は特有の貢献ができると考えられている。

「課題論文」の実際をイメージするには、そのタイトルを見るのがよいだろう。これは第4章にいくつか例示されている。その一部を以下に挙げてみよう。

- ・1920年代のサワードとイフワーンの同盟は、それぞれの目標の達成にどの程度貢献したか
- ・カナダの会話英語：地域による違いと国民性
- ・ワラジムシの習性、非生物学的指標、非生物学的因子、カム川の水質；フルーツ飲料のビタミンC含有量分析法の比較
- ・なぜ日本の競馬界は、純粋国内系統馬を育成しないのか
- ・日本の少年漫画は、アメリカのものとのように異なるアプローチを示しているか
- ・1945年にアメリカが日本に原子爆弾を落としたことは正当化されたか

後半の三つは日本のインターナショナルスクールにおけるものである。

上記のタイトルを見るだけでも、実に多様な分野の論文が著されており、しかもそのそれぞれがかなり専門的な内容を扱っていることがわかるだろう。いずれの場合も生徒は多くの資料にあたる必要があり、そこから自身のトピックに沿った特定の情報を抽出する必要がある。図書館員は、まさにそうしたニーズを満たすためのサポートが可能であり、さらに生徒自身が経験を通じてそのようなスキルを身につけていくための教育的貢献が可能である。

なお、第6章では、ほかにも興味深い指摘や提案がなされている。たとえば、教科書に対する生徒の信頼は厚いため、教科書を使った授業では生徒の図書館利用が阻害されることがあるという。また、学習に関して生徒が感じているプレッシャーの理解や、彼らのタイムマネジメント・スキルと学習との関係性、さらに生徒に対するストレス解消法の教授なども議論の射程に入れられている。

続く第7章では、「IBDPにおける教員、管理職および学校図書館員の役割」と題して、大人の側の問題が論じられている。とくに興味深いのは、教員の役割である。生徒の図書館利用は教員の考え方に大きく影響される傾向がある一方で、教員の側の図書館に対する認識や価値観は、自分自身が生徒であったころの経験にもっぱら根ざしているという。

したがって重要となるのが、図書館員からのアクションである。第8章では「利用者に焦点を当てた学校図書館」として、生徒と教員に対するアプローチの重要性が語られている。教員に関しては、些細な会話からも協働のヒントを得るべく頻繁にコミュニケーションをとること、教員の立場を理解してそのニーズを把握すること、職員会議や校内研修などの機会を活用することなどが挙げられている。そうした取り組みが結局は生徒の学びに資するのである。さらに図書館員は、生徒自身が「発見、探究、学びが行いやすい環境を提供すること」(p.92)に力を注ぐべきであり、そうして生徒自身が自分の情報ニーズに対して自分で応えることができるという自信を持つことができるように、貢献すべきであるという。

本書の原著は2011年に刊行されているということもあり、ICT環境と探究学習との関係についての言及はさほど多くない。ChatGPTのようなサービスが台頭する世界では、学びの成果を正當に評価することは次第に困難になっていくだろう。だが評者の見解では、だからこそ学びのプロセスを重視する構成主義的な教育はますます重要になっていくはずである。そのとき学校図書館はどのような役割を果たせるのか。本書には、そのヒントが随所に示されている。

なお、本書で述べられていることは、すでに確立されたものというよりも、あくまでヒントとして捉えた方がよいだろう。筆者自身も述べているように、学校図書館や学校図書館員のあるべき姿は決して画一的なものではなく、「無限の可能性がある」(p.i)。IBDPにおいてさえ、学校図書館がその役割を十分に果たしてきたと評価されているわけでは決していない。むしろ本書が著された動機は、学校図書館の可能的な役割を提示し、さらに多様な可能性に向かって議論を進めることであつたと言ってよい。

おそらく原文に起因すると思われる読みにくさがあることは否めない。だが本書が提示する多様な戦略や提案は、学校教育と学校図書館の未来をひらく一助となることは間違いない。

(評者：西田 洋平)